

目 次

山梨県立大学地域研究交流センター 2017 年度研究報告書

目次

1. 山梨県立大学地域研究交流センターの概要

2. 地域研究交流センターの活動内容

3. 地域研究交流センターの成果

4. 地域研究交流センターの今後の展望

5. 地域研究交流センターの連絡先

目 次

国際文芸交流を通して地域文化の基盤を創造する研究プロジェクト 研究代表者 高野 美千代	1
日本語を母語としない子どもたちの未来プロジェクト 2017 ーみんなで考える高校進学ガイダンスー 研究代表者 萩原 孝恵	25
医療療養病床の看護師が入院患者の日常生活援助を実施するうえでの困難 ～医療療養病床(20対1)に勤務する看護師へのインタビュー調査から～ 研究代表者 小山 尚美	51
峡東地域創生にむけた地域コミュニティの創造に関する基礎研究 研究代表者 安藤 勝洋	77
山梨県における外国籍住民の保健医療福祉をめぐって ー医療通訳の方向性の模索 研究代表者 長坂 香織	97
高校生を対象とした自殺予防教育に地域住民の参加を試みた取り組みの成果 研究代表者 清水 恵子	123
妊娠・出産・育児に多様なニーズを持つ在留外国人母子への 近隣住民および民間団体の支援の実態 研究代表者 小尾 栄子	149

国際文芸交流を通して地域文化の基盤を創造する 研究プロジェクト

<研究代表者>

高野 美千代 山梨県立大学 国際政策学部

<共同研究者>

井上 康明 俳人・俳句結社「郭公」主宰

二戸 麻砂彦 山梨県立大学 国際政策学部

オーラ・ライランズ・森田 山梨大学兼任講師

多田 幸子 山梨県立大学 人間福祉学部

目次

1. 研究の目的 3

2. 主な活動の具体的成果と評価 6

3. 研究成果報告 12

はじめに

2017年度、「国際文芸交流を通して地域文化の基盤を創造するプロジェクト」は、「地域文化の発掘と活用、地域文化の創造につながる研究」を目指して計画・実践された。この報告書においては、まず研究の目的を説明し、つづいて主な活動の具体的な成果と評価を記載する。そしてプロジェクトに関わった方々からの寄稿を含めて研究成果報告を掲載する。

1. 研究の目的

1-1. プロジェクト概要

本プロジェクトは、文芸による国際交流・地域交流を通じて、地域文化の発掘と活用、地域文化の創造を目的とする。具体的には、国際政策学部高野研究室で2014年以来実施している俳句による国際文芸交流、および2015年の地域研究プロジェクト「俳句(haiku)で山梨と世界を結ぶ」を拡大・発展させる形で、各種イベントを企画運営した。

計画した主な催しは、「1. 国際文芸講座」・「2. 文学散歩バスツアー」・「3. 富桜祭における模擬句会・英詩ワークショップ」・「4. 総合芸術イベント：ポエトリーリーディング」である。これらの取り組みを通じて、①山梨が生んだ文学を、地域そして国際的に紹介する。たとえば、より多くの地域住民に山梨県の文学的遺産である飯田蛇笏・龍太の作品を知ってもらうために、飯田龍太の弟子であった井上康明氏(本プロジェクト共同研究者)による講座・句会を開催する。②英国からのゲスト講師による英詩、英語俳句(haiku)講座を行う。英国詩人を講師に、英語俳句の歴史・作法・具体的作品の紹介を行う。地域からの受講者に対しては日本語で通訳を行う。また、ワークショップでは参加者が交流しながら日本語俳句、英語俳句を実際に作って発表する。そして①②による成果のすべてをバイリンガルで内外に広く公開する。

1-2. 背景

2014年度より、国際政策学部高野研究室が構成する「国際俳句の会」では、ロンドン大学ゴールドスミスカレッジと俳句による交流を行い、ゴールドスミスの学生が書いた英語俳句を県立大学の学生が日本語俳句に書きかえて、作品をやり取りするという活動を行っている。その成果は英国で書籍(*A Moth Anthology*, 2015)にまとめられて出版されたほか、英国の教育系学術誌(*Writing in Education*, 2015年春号)でも紹介された。この取り組みについては、新聞各紙(朝日・読売・山梨日日新聞)からの取材を受け、複数回にわたり記事を掲載してもらった。その結果、県内外の多くの方々から活動への関心や継続の要望が寄せられたため、2015年度は地域研究プロジェクトとしてより大きな枠組みでの取り組みを実施した。プロジェクトの一環とし

て、俳句ウィークと銘打って行った一連のイベント(英国人ゲストによる文学講演、文学散歩バスツアー、模擬句会、日英俳句展示会)には多くの県民が参加し、大きな成果を上げることができた。

日本が誇る俳人、飯田蛇笏・龍太親子を輩出した山梨には俳句愛好家が多い。本プロジェクトの共同研究者である井上康明氏によれば、実際に俳句を作って発表しているアマチュア俳人は県内だけで5,000人~6,000人を数える。また、英語俳句を作る活動も県内で長く行われてきた。現在では3グループが活動しており、50~100名の会員が英語俳句の作成を行っている。このように俳句作成をしている方たちに加えて、日ごろ新聞やテレビで紹介される俳句を読んで楽しんでいる市民そして学生も対象に、多くの人を楽しめる文化的イベントの開催を計画しようと2015年度、地域研究プロジェクト「俳句で山梨と世界を結ぶ」を展開した。国際的に著名な英米詩人・研究者にもプロジェクトへの参加を依頼し、研究報告書には大変貴重なエッセイを寄稿してもらったこともできた。さらに、報告書には山梨の文学の紹介や日英俳句作品等を日本語と英語の2か国語で収録したので、国内のみならず、海外でもプロジェクトの成果を知ってもらうことができた。予想以上の発展がみられたので、2017年度の新規プロジェクトでは、さらに範囲を拡大して俳句以外のジャンルも含め、より幅広い山梨の文学をもとにした地域文化の活用・文芸交流を行うことを目標に掲げた。

俳句の人気は海外でも非常に高く、老若男女を問わず俳句(haiku)を楽しむ人々が多い。英米では1950年代あたりから俳句が広く知られるようになり、現在も詩人や研究者はもちろん、一般市民、子どもたちの間でも俳句は好んで読まれそして書かれている。本学でも国際政策学部の授業において英語俳句の紹介を行ってきた。ロンドン大学ゴールドスミスカレッジでは、2017年度以降も俳句ワークショップを開き、山梨県立大学との文芸交流を継続したい旨を伝えてきている。

国際的文芸交流をさらに深めるため、2017年秋、ロンドン大学ゴールドスミスカレッジで博士号を取得している英国現代詩人のKatrina Naomi氏をゲストにお迎えして、前回の取り組みを発展させることとなった。Katrina Naomi氏は英国の大学で文芸創作の講師を務め、英国各地でポエトリーリーディングイベントに招聘されるなどして活躍する詩人であるので、本プロジェクト終了後には、山梨の文学を現地で紹介してもらうことができる。Katrina Naomi氏は芭蕉研究のために2017年10月に来日が決定しており、滞在期間のうちの3週間は山梨で過ごすことを希望していた。

1-3. 目的

本プロジェクトでは、俳句を中心とする山梨の文学的遺産を内外に知ってもらい、広めること、そして文芸を通じて国際交流を行い、国際理解を深める

ことを目的とした。飯田蛇笏・龍太親子からつながる地域文化の発掘と活用を行い、さらには海外の専門家・愛好者との俳句交流によって新たな地域文化の創造の基盤作成を目指す。国際化が進む地域社会において、人間の知性・感性による活動である文芸によって真の異文化理解、相互理解を実現する取り組みとする。

つぎの項（研究の方法と手順）で述べる一連のイベントの綿密な計画と実施運営、終了後の成果とりまとめ・成果物制作を研究チームが協力して行い、本プロジェクトの意義を広く内外に発信することとした。

1-4. 研究の方法と手順

2017年10月下旬から11月中旬にかけて、山梨県立大学を主な会場として一連の国際文芸イベントを開催した。ゲストは現代英国女流詩人のKatrina Naomi氏である。松尾芭蕉の研究と詩作活動のため5週間日本を訪問する間の3週間を山梨で過ごし、文芸交流および詩作活動を行った。

（2017年10月25日に甲府に到着し、11月15日まで滞在。）Naomi氏は、山梨県立大学をベースとして、研究・執筆活動を行う計画であるため、この滞在期間にあわせて県立大学の国際文芸交流プロジェクトのコアとなるイベントを展開し、ご協力をいただいた。

◇Katrina Naomi氏プロフィール◇

ロンドン大学ゴールドスミスカレッジでクリエイティブライティングを専攻（博士号取得）、詩人、英国ファルマス大学（修士課程）講師、ロンドン大学ゴールドスミスカレッジ研究員。代表的出版物（詩集）として、*The Way the Crocodile Taught Me* (Seren Books, 2016) および *The Girl with the Cactus Handshake* (Templar Poetry, 2009)（英国芸術協会ライターズアワード受賞）が挙げられる。その他、英米の学術誌、現代詩のアンソロジー等に収録された作品は多数。詩作活動のほか、英国各地での英詩ワークショップ開催、講演活動、英詩コンペティション作品審査、ポエトリーリーディング出演等を精力的にこなしている。

2017年秋、松尾芭蕉の足跡をたどり、日本の田舎を訪ねて地方文化を知り、詩作活動を行うことを目的に、英国アーツカウンシルから助成金を得て来日。奥の細道のルートをめぐる旅をするほか、自然豊かな山梨における約3週間の詩作活動、日本の現代詩人との交流などを行った。

本プロジェクトで実施を計画した主なイベントはつぎの通りである。

I. 文学散歩バスツアー

2015年度のプロジェクトで実施して非常に好評であった山梨文学散歩バスツアーを再度実施する。日には11月3日（祝）を候補とした。参加希望は広く募り、だれもが自由に参加してゲストKatrina Naomi氏と交流できるように手配する。訪問先はたとえば（A）飯田蛇笏・龍太、太宰治の軌跡をたどる笛吹市、富士吉田市方面、（B）芥川龍之介や若山牧水が作品に綴った北巨摩地域、（C）身延山、四尾連湖方面の訪問などのコースを候補として検討して決めることとした。井上康明氏は山梨の文学散歩を何度も計画・実施した経験があるので、井上氏にリードしてもらいながら貸し切りバスでルートをめぐる。このバスツアーは、英国からのゲストを含めて、参加者が山梨の文学を知る機会となる。また、山梨を代表する俳人の井上康明氏から解説を聴きつつ、現代英国詩人のNaomi氏と交流ができるという大変充実した内容のバスツアーとなる。

II. 富桜祭における模擬句会・英詩ワークショップ

山梨県立大学の富桜祭（11月4日・5日開催の大学祭）において、俳人の井上康明氏による模擬句会及びKatrina Naomi氏による英詩ワークショップ、さらに作品展示を県立大学飯田キャンパスで行う。文学散歩に参加した人にとっては、その経験を基に句会や英詩ワークショップで実際に作品を書くという取り組みとなる。これは、前回のプロジェクトと同様に学園祭期間に計画したが、前回の経験から、学生の保護者や近隣住民など、偶然会場を訪れる方が多いことが予測されるため、より多くの方にこの取り組みに参加してもらえることを意図したものである。

III. 総合芸術イベント：ポエトリーリーディング

11月12日（日）、甲府市藤村記念館においてポエトリーリーディングを中心とした総合芸術イベントを開催する*。映像と音楽を添えてKatrina Naomi氏に作品朗読をしていただく。あわせて日本、山梨の文学作品を日本語及び英語で紹介・鑑賞する。会場には詩人Katrina Naomiの作品および山梨文学に関連する資料や本プロジェクト（句会・英詩ワークショップ）による作品等の展示を行う。十分な広報を行い、多くの県民に訪れてもらえるような催しとする。

ポエトリーリーディングは欧米で非常にポピュラーな催しである。たびたび音楽とのコラボレーションによって詩人が作品を朗読する総合芸術的なイベントで、日本でも徐々に浸透してきているアートの一形態である。私たちが行ってきた過去の国際文芸イベントでもポエトリーリーディングに音楽は不可欠であった。2015年に英国と甲府で開催したイベントでは、音楽に乗せて文芸作品を発表する

企画を行った。英国ではスクエアピアノ、ピオラダガンバ、箏、甲府ではクラシックギター、尺八が演奏された。本プロジェクトでも、このような形式の総合芸術イベントの開催を意図する。

1-5. 研究の地域貢献との関連性

山梨学院大学では酒折連歌賞を主催し、国内のみならず海外からも人々が参加する「短歌」による文芸プロジェクトをこれまでに19回開催している。県立大学においても文芸の面で地域および国際交流を行うことができれば、これまでの県立大学による地域貢献活動がさらに豊かなものとなるであろうという思いが、私たちの活動のスタート地点であった。たとえば山梨県内には数千人の俳句及び英語俳句愛好者がおり、このプロジェクトの成果をともに享受することができる地域住民の数は非常に多いことが期待できる。それに加えて、国際化が進む地域社会において、重要な財産である文芸遺産を英語で発信することができるような基盤を本プロジェクトにおいて築くことができれば、この先も山梨を訪れる外国人観光客やビジネス客を対象に、真の国際理解・相互理解への道を開くきっかけを作る可能性が大きく、発展性のある取り組みになると考えている。

将来的には、本プロジェクトの成果物として山梨の文芸を扱う冊子をバイリンガルで制作し、関係各所に設置あるいは配布するなどできれば、地域住民のみならず、山梨を訪れる国内外の無数の人々に対して本プロジェクトの成果を享受してもらうことが可能となる。

1-6. 研究の波及効果

外部協力者の俳人・井上康明氏には、2015年以来、県立大学の国際文芸交流にかかわっていただいている。井上氏の主宰する俳句結社「郭公」は全国に1千名以上の会員がいる。さらに井上氏は山梨県内外で俳句の指導・審査・句会運営等を行っている。そのため、井上氏の関係者だけでも数千人の文芸愛好者が本プロジェクトを知り、本プロジェクトが提供する様々な交流イベントに直接的あるいは間接的に参加する人が多数となることと予測される。国際的な文芸交流を通して自国の文化を知り、発信することは本プロジェクト終了後も継続されていくであろうし、外国の文芸を知り、受け入れることでグローバル化が進む地域における国際理解の基盤を形成するのに役立つであろうことは言うまでもない。

その他、英国ロンドン大学ゴールドスミスカレッジのモーラ・ドゥーリ先生とも本プロジェクトの説明を行い、理解を得ている。2015年来実施しているように、2017年度もロンドン大学と県立大学で相互に句会やワークショップを開催して成果を交換し共有することとなった。本プロジェクトによ

て規模を拡大し、成果物をバイリンガルで作成・共有することによって、英国においてもこの国際文芸交流の成果を目にする人が増え、活動への参画希望者も増加し、プロジェクトが末永く発展していくことが期待できる。

本学を含む山梨県内の大学で英語科目講師を務めるオーラ・ライランズ森田先生にも研究協力者としてプロジェクトに参画していただくこととなった。ライランズ先生は日英の文芸の素養を持ち、創作活動を行っているほか、2015年度から県立大学での俳句による国際交流にも参加している。本プロジェクトではゲスト来日の際の通訳及び文芸作品紹介・交流における翻訳業務補助等において協力を得た。ライランズ先生は地域に密着した読書サークル(英語)を主宰しているため、このメンバーの方々にも本プロジェクトで行うイベントに参加を呼びかけるなど、受益者拡大につながる広報もご担当いただいた。

研究協力者をはじめとする多くの方の協力を得て進めたこのプロジェクトの波及効果は、日本国内にとどまらず英国を中心とする海外にも広がっている。その理由はもちろん国際的なネットワークを通して、日本語と英語の2か国語を用いた取り組みであったことによる。それに加えて、国や性別、年齢を超越した人間同士の、文芸による内面の交流が目的であったためと考える。地域の遺産である歴史文化・文芸を最大限に活用して、前回よりもさらに多くの方々が恩恵を受けられるようなプロジェクトが実践できたのではないかと考えている。

2. 主な活動の具体的成果と評価

2-1. 山梨文学散歩／吟行

2017年11月3日、身延方面に文学散歩バスツアーを行った。(参加者31名。) ルートは身延山久遠寺、なかとみ和紙の里、ゆばの里、四尾連湖である。当日は各地を訪れながら参加者が自由に俳句を詠み、投句して、井上康明氏が各句を読み上げて解説・批評を行うという「吟行」の形を取ることもとなった。作品は後掲する。

身延山久遠寺は日蓮宗総本山であり、国内外から多くの人々が訪れる山梨県内では有数の名刹である。秋は周囲の山々が豊かな紅葉にあふれ、天候にも恵まれ文学散歩には最適の朝であった。

参加者は山梨を代表する俳人の井上康明先生をはじめ、セミプロ、熱心なアマチュア、初心者、まったくの俳句未経験者等々さまざまな顔ぶれであったが、互いの作品を鑑賞しながら一日を過ごすこととなった。英国詩人のカトリーナ・ネイオウミさんも英語で俳句を執筆し、投句した。この文学散歩の中で共に訪ねた山梨の名所からインスピレーションを得て、異なる言語によって書かれた作品を鑑賞し合う珍しい機会となった。

山梨県に住みながらも、日常生活においては山梨ゆかりの文学に触れる機会が少ないことは否定できない事実ではないか。山梨県外からの移住者、訪問者にとってはなおさらのことであろう。身延山や四尾連湖は昔から物語や詩の題材となっている。実際にその場所を訪れて古くから知られた作家作品を身近に感じ、鑑賞するという従来の文学散歩のスタイルを踏襲しながら、実は体験する事柄を題材に俳句を書くという吟行である。井上康明氏ならではのアイデアで行われたこの行事は参加者全員が非常に感銘を受け、この種の催しの継続的実施を要望する声が多く上がった。



文学散歩バスツアー・身延山久遠寺山門前にて

2-2. 11月3日吟行作品紹介

■身延山久遠寺 俳句作品

砂をかむぼっくりの鈴七五三	繁臣
山門に秋日あつめて大草鞋	同
冬桜木証はたと止みにけり	同
墨龍の眼の動く小春かな	同
秋冷の僧の急げる鶯廊下	同
題目の梯上りゆく秋の寺	同
木証の澄みわたりたる身延谷	同
菩提南天色付く杖頼み	まゆみ
悠々と秋空を舞うとんぴかな	同
秋空に響く久遠の僧の声	和恵
山道をともに歩いて秋の風	同
紅葉を愛でつ唱えるお題目	和江
小春日や時間止まるごと身延山	同
若僧のお経紅葉にこだまする	同
紅橙黄の重なりて身延山	同
紅葉なす日蓮聖人おはす山	同
秋の陽にキラリゆらりと富士の川	同
西日受け紅葉の色のさらに増す	同
菩提梯のぼり晴ればれ文化の日	京子
落葉ふみひたすら上へ三百段	同
一片の雲空になく秋高し	同
寒禽の声尖りたる古刹かな	同
山紅葉せり仁王の目が光り	輝子
秋深き御堂を巡る経のこゑ	同
晩秋のしろがねの日や杉の闇	同
晩秋の草鞋に日の斑ゆうゆうと	同
結界の紅葉題目はじまりぬ	同
秋高し木の葉ふるはず経のこゑ	同
山肌の落葉の濡るる匂ひかな	幸子
日本三大三門や照葉かな	同
山紅葉五重塔の朱赤増し	同
深秋の百畳御影その奥に	喜躬子
小走りの雛僧廊の秋陽濃し	同
秋の日のモザイク模様身延山	ゆかり
文化の日きらめく光木に水に	同
お題目唱え結界越えて冬	優子
ゆつくりと鶯弧を描く紅葉山	同
空青し桧山杉山紅葉山	同
欄干にもたれてをりぬ実南天	陽子
鼻先にもみしてをり枝垂かな	同
ゆつくりと石段秋の陽を浴びて	康明
まぶし陽や紅葉の山に願満堂	美千代

■四尾連湖 俳句作品

秋高し山のふところ深き水	ゆかり
湖に赤きもみじの影かすか	同
秋日濃し句材求めてバス旅行	繁臣
水鳥の水尾を曳いては着水す	同
歩く毎水面の揺るる秋の水	同
雲と日と紅葉讀えて山上湖	同
紅葉に埋もる湖面犬吠えて	同
山あいの水面に映る秋の空	和恵
青き空湖面の上に紅葉山	同
動かざる紅葉の上の流れ雲	和江
山あいの水面に揺れる紅葉かな	同
水面に映る紅葉と空の青	早季
四尾連湖に光る水面金の鯉	同
竜胆の薄紫に山の湖	優子
坂降りきつて黄落の山の湖	同
秋の湖舟のオールの動くのみ	輝子
秋の湖ゆく水色のワンピース	同
木の間より湖のきらめき濃りんどう	同
山の水池へとくだる秋日和	同
銀杏一樹に湖うるむひとところ	幸子
日の当る山の湖りんどう群るる	同
りんどうの日なた湖照り樹に枝に	喜躬子
さば雲や日の弱り初め山上湖	同
野りんどう秋陽を浴びて並びをり	まゆみ
空の陽と水面の夕陽が照り映えて	同
淵深く水底深く龍は住む	同
紺碧の水面は深く秋を呑む	同
秋空に伸ばす掌紅く燃ゆ	月人
惜しみなく落暉を浴びて冬の湖	京子
紅葉が映える水面に身延の歴史	涼太
紅葉の水辺にひそむ黒い点	郁弥
四尾連湖や水面に映ゆる秋の空	朋美
秋の雲たかだかと地を送りけり	康明
四尾連湖や人知れず咲くゲンチアナ	美千代

身延山・下部・四尾連湖旅行 参考資料

平成二九年一月三日（金）

県立大学—身延山—下部・中富—四尾連湖—県立大学

■ 身延山久遠寺

日蓮宗総本山。日蓮（一二二二—一二八二）は、一二五三年、三二歳で開宗。一二七四（文永一一）年五月一七日、波木井の南部実長の領地身延山に入り、六月一七日、西谷に庵を構えた。一二八一（弘安四）年、身延山久遠寺と命名。翌年一〇月一三日、武蔵国で入滅。西谷草庵の北に墓所。第一代日朝は一四七五（文明七）年、西谷から現在地に諸堂移転。江戸時代の初め、第三代日脱三六坊建立。一七一二（正徳二）年には坊一三三となる。現在三二の坊。昭和三八年、ロープウェイ完成。昭和六〇年大本堂落成。

□宝物：○国宝、「絹本着色夏景山水図」徽宗皇帝筆と伝。一六七二（寛文一二）年、遠州掛川の太田資宗から寄進。○重要文化財、「宋版礼記正義」古代中国の礼儀集。○重要文化財「本朝文粹」嵯峨帝の弘仁年間（八一〇 - 八二三）から後一条帝の長元年間（一〇二八—一〇三六）の二〇〇余年の詩文を編集。

○武田信玄寄進「七巻本法華経」武田信玄署名。○県文化財「銅鐘」一二八三（弘安六）年の铸造銘。県内最古鐘。○県文化財「朝鮮鐘」一六六〇（万治三）年、中島氏寄進の銘。鎌倉時代初期の铸造。

□祭礼：五月に釈迦誕生を祝う五月大会。六月に、開關会。十月に日蓮入寂を弔う十月大会を行う。三大大会。

□身延講：身延道者：題目大書の笈摺、白手甲、白脚絆、団扇太鼓、白衣。身延道中。「法華諸国霊場記」は案内書。勝沼立正寺、石和遠妙寺、甲府遠光寺、同信立寺、青柳昌福寺、小室山は順路。

□日蓮上人碑「(略)墓をば身延山に立てさせ給へ。未来際までも、心は身延山に住むべく候。(略)」碑。久遠寺草庵址近く。昭和四二年六月一日建立。旅の途次、日蓮の波木井実長宛て書簡の条と伝。参考：日蓮和歌「たちわたる身のうき雲も晴れぬべしたえぬみのりの鷺の山風」身延山安住の法悦を表すと伝。■十返舎一九「金草鞋（かねのわらじ）身延道中乃記」文政二（一八一九）版行。江戸四谷新宿から甲州街道を甲府へ。鰻沢から身延山参拝。大野から富士川を下り東海道を江戸に帰る。宿場毎の名物が語られる。

■落語「鰻沢」初代三遊亭円朝が高座で客から出された「毒消し」「鉄砲」「玉子酒」題を詠み込んだ三題噺。身延山へ寒参りに来た江戸の若旦那。小室山で「毒消し」の護符を頂く。身延山詣でを終え、大雪の帰り、山中の一軒家に泊。その宿の女房が元吉原の月の戸花魁のなれの果て。小判を狙われ、しびれ薬入り「玉子酒」を飲まされる。毒消しの護符を口に逃げるが、「鉄砲」片手に追われ、題目を唱えながら崖から早川へ身を投げ筏に落ちる。一気に流さ

れ一本の材木（題目）に救われる。夏でも涼しい円朝の名作。

■宮沢賢治歌碑「塵点の劫をしすぎていましこの妙のみ法にあひまつりしを 賢治」久遠寺三門奥。昭和三六年一〇月宮沢賢治研究会建立。賢治二七回忌。「雨にも負けず手帳」より。花巻市石上町日蓮宗身照寺は、宮沢家の菩提寺。

■高濱虚子句碑「相対す吉野桜の幹太く 虚子」堤俳一佳「芹青く西谷の水澄めりけり 俳一佳」小松きよ「西谷の花の浄土に住み古りて きよ」子弟句碑。身延山西谷武井坊庭園。昭和五五年一〇月一三日建立。虚子が昭和三三年四月一三日武井坊泊、詠。

■若山牧水歌碑「山越えて入りし古駅の霧のおくに電灯の見ゆ人の声きこゆ 若山牧水」下部、源泉館前。

昭和五五年二月二六日建立。明治四三年六月泊の詠か。

■若山牧水歌碑「山巖のしげきこの山いづかたの巖に啼くらむ筒鳥聞ゆ 若山牧水」昭和四五年一月二六日、早川町七面山登山口に建立。大正一三年六月一六日身延山詣での作。

■若山牧水「身延七面山紀行」（大正一四年執筆）：牧水の一連の紀行文のひとつ。大悟法利雄と同道。沼津から富士宮の浅間神社に参詣し、身延線で身延駅下車。身延橋を渡り、富士川をさかのぼる白帆船、川で海水着を着て泳ぐ女性を見る。総門、三門、菩提梯を上る。当日、大正一三年六月一六日は六五年の開關大法会の日。深敬院、ホトトギスを聞き、御草庵跡を過ぎる。山を越え赤澤村のゑびす屋に宿泊。七面山、笹が嶽を見、河鹿を聞き一夜を過ごす。春木川を越え、羽衣橋、白糸の滝を過ぎる。澄んだ声の水恋鳥、ぼつぼつ鳴く筒鳥の声を聞く。奥の院に宿泊、長さ一二、三尺の布団に寝る。御神木アラギを見、霧の山をたどり郭公の澄んだ声を聞く。やがて久遠寺、身延町、身延駅に到着する。

■飯田蛇笏「極寒のちりもとどめず巖ふすま」

「富士川舟行」と前書き。大正一五年作。身延町飯富の富士川屏風岩を描写。孤絶屹立する岩を描く。

■飯田蛇笏「除夜の鐘幾谷こゆる雪の闇」「身延山除夜」と前書き。昭和二二年作。

■飯田龍太「巖を打つてたばしる水に額咲けり」「毒うつぎ熟れてやまなみなべて紺」昭和一六年西山温泉

■大町桂月歌碑「酒のみて高根の山に吐く息は散りて下界の雨となるらん 大正十三年夏 桂月」農鳥岳三千二十六メートル山頂。昭和三十三年七月西山観光協会建立。大正一三年七月二一日登山時の短歌。

■下部町不二ホテル「三田村鳶魚翁終焉之地 海音寺潮五郎書」碑 昭和四三年五月一四日建設。三田村鳶魚（明治三年三月一七日～昭和二七年五月一四日）江戸文学考証家。昭和一九年から二一年当地へ疎開。晩年生活し死去。除幕式に海音寺、井伏鱒二など参列。

■山口青邨句碑「くさぎの花さかりににほふ微笑佛青邨」句碑。下部町丸畑永寿庵。昭和四四年七月二

○日建立。木喰上人は江戸時代後期の遊行僧。丸畑に誕生。如来、観音等木喰仏を彫る。県指定民俗文化財。

☆井伏鱒二と身延、下部、波高島

■井伏鱒二「按摩をとる」『厄除け詩集』(昭和一二) ここは甲州下部鉾泉の源泉館 その二階の一室である 御一泊は 一等四円五十銭 二等三円五十銭

三等二円五十銭と書いてある 私は右枕に寝ころんで 按摩に肩を揉ましてみる 按摩は毛糸の袖なしを着て ロイド眼鏡をかけてみる 彼の目にはまつ毛も目蓋もない その目はまるでコスモスの実の一粒である 私が「青い鳥」を朗読してゐると しかしそのコスモスの実からじっとりと涙が出る

■井伏鱒二『佗助』(昭和二一年一二月鎌倉文庫) 「佗助」は「波高島」(「改造」昭和二一年五月掲載)が前半となった小説。富士川の下部川との合流地点に波高島という中州があった。江戸時代、宝永年間、「生類憐みの令」に背いた罪人の収容所だった。主人公の餌差の佗助が、島役人の監視のもと、山火事でタヌキを死なせた久那土村のオスギ、鶉飼の家柄で鶉飼をとがめられた竜王村のオモンなどと対岸の森へ鳥刺しに行っているうち、宝永四年、波高島は、富士山噴火によって流され消滅してしまう。

■井伏鱒二「丸木橋」「九月二十日記」(昭和二七) 「丸木橋に関する思ひ出」(昭和三二): 甲州波高島の鉾泉宿に隠棲する三田村鳶魚訪問記。戦時中の疎開時の身延詣で、明治大学出身の宿の若主人が献身的に鳶魚に尽くすこと、宿までに川があって身延線の鉄橋、降雨時に流れてしまう丸木橋がかかっていることなど。

■井伏鱒二「七面山所見」(昭和一一)「夏のお山講」(昭和一一) 以上随筆。「伊之助の短文」小説(昭和三〇): 身延山、七面山登山、奥の院宿泊譚。従弟の伊之助の告白。伊之助は、食品会社の依頼によって、ミヅという食用植物、養蜂のためのトチの木の調査のため、七面山登山、奥の院に宿泊。芝浦の花柳界の女性の一行と出会い、喜良久というお茶屋の内儀と知り合う。その夜は新潟の講中と同じ長い布団に寝て、老婆の泣き声に悩まされる。帰京後、喜良久に通うようになる。精進湖に宿泊していると喜良久の内儀が自殺をはかったマツ公という美人の女給を連れてやって来る。療養のために七面山に上り、三人で長布団に寝て悶々と一夜を過ごす。伊之助は、食品調査の給料を喜良久の内儀に執心して使って借金がかさみ、妻に内緒にしてくれという。

■高濱虚子句碑「裸子をひつさげあるくゆの廊下虚子」下部町湯元ホテル入り口。昭和二二年夏建立、二三年十一月二三日除幕。昭和二一年八月三〇日虚子の当地詠。堤俳一佳主宰「裸子」昭和二四年創刊。

☆下部町下部ホテル庭園

■高濱虚子句碑「この行や花千本を腹中に 虚子」昭和三四年一月二九日、堤俳一佳など除幕。虚子昭和三三年四月一三日、「裸子」百号記念大会の当

地詠。

■高野素十句碑「百枚の浴衣を干すも花の中 素十」昭和四五年一二月六日建立。素十昭和三五年四月七日にここで作句したもの。

■堤俳一佳句碑「春惜む花も過ぎたる山の湯に 俳一佳」昭和四五年六月二八日建立。昭和三四年四月の句。

■北村透谷文学碑「けさ立ちそめし秋風に「自然」のいろはかはりけり(略)蒙軒学舎に学んだ透谷を伝え(略)」南部町立南部中学校門脇。昭和五三年建立。初代県会議長近藤喜則が明治二年創設の蒙軒学舎。二一年まで一三歳以上の若者に漢学、英学、数学を教授。

☆四尾連湖

■野沢一詩碑「ああ されど湖のみは いつもながらの風光に かげうららかに 桃の枝は育ち 栗鼠はなくて 山鳥はあのだのしいさわがしい 唱をうたい 山は立ち 水はほとぼしりいでて とこしえに しびれ湖とたたえられてあれよ 野沢一」四尾連湖北峠。平成元年六月四日建立。野沢一は詩人。昭和四〜八年四尾連湖に隠棲、そのとき詩作。詩集『木葉童子詩経』自費出版。高村光太郎と文通。光太郎は「大龍の訪れ」と言った。昭和二〇年六月三日病没。四一歳。碑は増穂町上高下の光太郎碑「うつくしきものみつ」を望む。

■座光寺南屏漢詩碑「(前略) 蛾岳有神仙 蹇湖龍上天 正名不所作 万物本来然」四尾連湖子安社にある。

座光寺南屏は市川大門のひと。医。儒学者として体系をたてる。漢詩、和歌、随筆あり。文政元年六月一七日八四歳で没。市川大門、宝寿院に永眠。

参考資料

『山梨百科事典』(一九七二・六・一〇 山梨日日新聞社)、『井伏鱒二全集』(一九九八 筑摩書房)、『若山牧水全集』(平成五年八月 増進会出版社)、『飯田蛇笏集成』(一九九五 角川書店)、『飯田龍太全集』(二〇〇五 角川学芸出版)。

歌碑、句碑等、碑については、奥山正典『甲州の文学碑』(昭和六二年八月三十一日美知思波発行所)、同『続・甲州の文学碑』(平成六年一月三十一日 美知思波発行所)の記述に従った。



井上 康明
(俳人)

2-3. 11月4日模擬句会・英詩ワークショップ

2017年度山梨県立大学地域研究プロジェクト-国際文芸交流を通して地域文化の基盤を創造する-

日本語と英語を使って
創作に挑戦!

新たな発見も!



国際文芸交流イベント 模擬句会と英詩ワークショップ

日時 2017年11月4日(土)
午前10時- 模擬句会で作句を作ってみよう
午後1時半- 英詩ワークショップ
☆午前の部のみ先着15名様までとさせていただきます。

場所 山梨県立大学飯田キャンパスA館6階サテライト教室
☆筆記用具をお持ちください。

参加費は無料です。午前のみ、午後のみのご参加も可能です。
日本語・英語で作品を書いてみませんが、お気軽にお越しください。

講師
午前の部：井上康明氏
山梨県在住俳人、
俳誌『鯉』主宰
午後の部：
Katrina Naomi氏
英国詩人。

主催 / 山梨県立大学国際政策学部高野研究室 お問い合わせ / TEL 055-224-5260 (山梨県立大学学務課) Eメール english@yamanashi-ken.ac.jp

吟行の翌日、2017年11月4日に、山梨県立大学の学園祭(富桜祭)と重ねて学内で模擬句会と英詩ワークショップを開催した。このイベントに関しては県内の俳句関係者をはじめとする文学愛好者を中心に、その他一般の方々を対象に広報を行った。

俳人の井上康明氏による午前の模擬句会には20名以上の参加があった。このイベントにも、常日頃から俳句を好んで書いている熱心なアマチュア俳人、英語俳句を長年書いているグループの方々、ほとんど経験のない外部の方、学生たちなど、様々な習熟レベルと幅広い年齢層の参加者があった。

井上氏の司会で進められた模擬句会は、カトリナ・ネイオウミさんも通訳を介して積極的に参加しながら行われた。参加者各自2~3句の俳句を詠み、相互の作品を鑑賞し、井上氏の解説を聴いた。選句においてはセミプロと初心者の判断・認識の違いが鮮明に出ており大変興味深い結果となった。「模擬」句会ならではの展開と言えよう。井上氏の説明が非常に丁寧でわかりやすく、しかも常に肯定的な部分をとらえて作品のコメントをなさるため、雰囲気は終始和やかであり、初めて句会に参加する方たちや学生たちにも大変好評であった。

一方の英詩ワークショップはカトリナ・ネイオウミさんの司会で同日の午後、行われた。一部午前から引き続きの参加者もあったが、外部の方はほぼ入れ替わる形となった。参加人数は同じく20名程度であった。俳句とは対照的な自由詩をテーマに、やさしい英詩2編の鑑賞法と解説を、司会のカトリナさんがしてくださり、その後、参加者による英詩の執筆及び発表が行われた。ワークショップは英語で進行され、一部日本語の説明が補われるのみであった。英詩2編を読んで鑑賞する場面でも参加者の理解力は大変鋭く見え、さらに驚くべきは、参加者のほぼ全員が自分の詩を読み上げたことである。こちらも学生から80歳代の文芸愛好者まで幅広い年齢層の参加者があったのだが、ほぼすべての方が英語で短い作品を即興で書き、それを堂々と読み上げた。日本語で書いた詩を読み上げた方もあった。このような展開にはカトリナさんも驚いて目を丸くしていた。相互に作品を読み合うという、大変感動的なイベントとなった。

英詩ワークショップ終了後もしばらくの間、地元の詩人・詩愛好家とカトリナさんのやり取りは続いた。自身で出版した詩集を持参する方、所属する詩のサークルの冊子を持参する方などが積極的にカトリナさんとの交流を行い、山梨と英国の詩人の間でなかなか話が尽きることはなかった。

地域の大学として、このような文芸交流イベントを一般の方々に提供することができたことは非常に意義深かったと考えている。

2-4. 11月12日総合芸術イベント Reading Tales and Poems

欧米では盛んにおこなわれている文芸イベントであるポエトリーリーディングを、山梨県でも広め、楽しんでもらうための試みとして、甲府駅北口広場内の藤村記念館にて企画することとした。準備段階より、甲府駅北口まちづくり委員会の日下様に大変お世話になったことを感謝している。

幅広い年齢層に受け入れてもらえるように、また、国際性を出すために、①作品は日英二か国語で読むこと、②3部構成として子供からお年寄りまでが楽しめる作品を取り入れること、③朗読のみならず、一流の音楽を同時に鑑賞してもらうことにより、芸術性の高いイベントとすること、以上3点をポイントとした。

聴衆には、会場に設置されているスクリーンで作品の英語部分を映し出し、見てもらうこととした。パワーポイントでスライドを作成し、作品を短く区切って可能な限り大きな文字で読みやすく整えた。朗読する作品はあらかじめ研究室内で調整を行い、3部通して英語を朗読するカトリーナ・ネイオウミ氏と相談しながら決めていった。第1部は物語(tales)を扱った。山梨のむかしばなしについては研究室で作成した冊子 *Yamanashi Folktales* より日本語の朗読を担当する廣瀬かほる氏に作品を3編選んでいただくこととした。第2部から詩(poems)を扱ったが、まずはカトリーナ・ネイオウミ氏の詩集 *The Way Crocodile Taught Me* (Seren, 2016) から作者であるカトリーナさんの希望を取り入れながら研究室の学生が訳したものを主に選んでいる。第3部では詩と俳句を朗読した。具体的には、まずはロンドン大学ゴールドスミスカレッジの教員であり詩人のモーラ・ドゥーリ先生による俳句及び教え子である大学院生によるオリジナル英語俳句に、県立大学の学生たちが解釈して創造した日本語俳句を発表した。そして、現代詩壇で世界的に有名なアメリカ詩人ビリー・コリンズ氏の俳句を英語と日本語で朗読した。つぎにこの国際文芸交流に当初から協力してくださっている著名な浮世絵研究家であり詩人のロジャー・キーズ氏の詩“Hokusay says”を朗読した。日本語は県立図書館の山形課長による。素晴らしい声で読まれた作品は、聴衆を圧倒した。最後に、山梨県の俳句が詠まれた。カトリーナさんが選んだ飯田蛇笏と井上康明氏による俳句である。日本語のオリジナルは井上氏が詠みあげ、つづいてカトリーナさんが自身で解釈し、英語の俳句に書き直したものを披露した。

ビリー・コリンズ氏はベストセラー詩人で、世界的に著名でありながらも、私たちのささやかな国際文芸交流プロジェクトに大変好意的であり、温かい理解を示してくださっている。作品のやりとりや質問に対する応答なども、関心を持って積極的にしてくださっている。五七五の伝統を重ん

じるコリンズ氏の作品にはつぎのようなものがある。

After I removed
the wind chimes from the back porch,
I could hear the wind.

Billy Collins

(風鈴を外せば風の聴こえけり)

英語の場合、音節で五七五に整えるのが苦難の業であるが、この作品も見事に俳句の形に作られている。また、コリンズ氏は季語を取り入れるのを重視しているだけに、「風鈴」という言葉があり、訳して日本語俳句風に直しても違和感のない、それらしい響きがある。

上記の例の如く、英語の俳句は基本的には、上の句・中の句・下の句で3行にわたって書かれる。もちろん、現在では形式にこだわらず自由に俳句を書く人も多いのであるが、コリンズ氏があえて俳句の五七五の詩形を守るのは、彼が *Haiku in English: The First Hundred Years* (Norton, 2013) の序論で言うように、制約がある中で詩(俳句)を書くことによって新たな発見があったり、自身の表現行為において謙虚さを維持することが可能だからという。英米で大変人気の高いコリンズ氏から、本イベントにお力添えをいただくことができたのは、誠に光栄である。

山梨の俳句を英語で紹介することは珍しい機会となったが、英語の解釈・英語俳句への書き換えを行ったカトリーナさんは大変興味を惹かれ、今後も継続して飯田蛇笏、龍太、井上康明氏の作品を読み、英語で紹介したいと願っている。カトリーナさん自身は英語俳句を多く書いてきたわけではないのだが、今回の経験を基にして、可能であるならば将来的に多くの人の眼にとまるような形で発表したいと語っていた。

もうひとつ、特記事項としては、このポエトリーリーディングを芸術性の高いものとして実現するために、生田流箏曲奏者の安藤珠希氏に演奏で参加していただいたことが挙げられる。安藤氏は幼少のころから類まれな才能を発揮している演奏家であるが、東京藝術大学から大学院に進み、博士号を取得している研究者でもある。安藤氏が山梨で演奏するのは初めてということで、非常に貴重な機会となったのは言うまでもなく、イベント聴衆の方々からは大きな反響を得た。安藤氏は第1部から3部それぞれの雰囲気や作品の内容に応じた曲を奏で、その繊細で可憐なそして時には力強い演奏にその場にいた全員が引き込まれた。

Reading Tales and Poems においては、音楽と文芸、朗読の融和の瞬間を一同共有し享受することができた。2時間弱のイベントであったが、子どもからお年寄りまでの50名ほどの聴衆と、学生を含む10数名の出演者が芸術を通じて一体となり、豊かな交流、交感が行われた特別な機会となった。

3. 研究成果報告

All Aboard the Magical Mystery Haiku Tour!

Weather wise, it seems that Takano sensei may have a special contract with the “man up above” as all the literary tours she organises are carried out in splendid sunshine and today was no exception. The sun shone brightly on a mild autumn day as we gathered in the grounds of Kenristu University. Groups of students from the university Haiku circle mingled with the disciples of Haiku poet Mr. Inoue and teachers, all getting to know each other. Although the weather was mild, it was November and most people were already dressed in winter clothing. This was in stark contrast to one lady, dressed in a brightly coloured, short sleeved, dress and sandals. Her hair, an elegant up-do, revealed her dangly, blue earrings and a pretty, white flower covering one ear. This was the English poet Katrina Naomi, visiting Japan to give a series of lectures and poetry readings and who was joining the tour. Little did we know it at the time, but she was the only person dressed for the occasion, as by midday the temperature had climbed and people were beginning to peel off jackets and sweaters.

30 people and a sweet, plump baby of one of the professors boarded the bus and we travelled south in the direction of Mt Minobu and the Temple of Kuonji, Head Temple of Nichiren shu Buddhist sect. The atmosphere on the bus, helped by the “goody bag” and coffee, with which each person was provided, was relaxed and friendly.

However, the premise of the literary tour is to visit places connected to Haiku or a particular writer and in turn be inspired to write a Haiku poem on the thin strips of paper provided for us (with our goody bag) by Mr Inoue. As in time honoured Japanese fashion, each person introduced themselves and we settled in to enjoy the sights on the 90 minute bus ride to Mt Minobu. We followed the ambling Fuji River for most of the way, admiring the hillsides, ablaze with the autumn leaves at their very best. On arrival at Minobu town, our bus driver skilfully navigated the frighteningly narrow streets and from our high vantage point on the bus we could see the old wooden shops and tea houses selling a huge variety of sweets, soba and all things concerning pilgrimages to the nearby Kuonji Temple.

Although it was peak “changing of the leaves” season the Temple grounds were spacious uncrowded and our visit unhurried. We encountered white robed pilgrims chanting their prayer “Namu Myoho Renge Kyo” as they crossed through the 3rd largest gate of Japan and began to climb the tree lined steps to Kuonji Temple. We followed and were grateful for the cool shade of the giant cedar trees lining the 287 stone steps up to the Temple. It is said that if one climbs the steps, one reaches a state of Nirvana. However, most people just seemed happy to have reached the top and still have breath to spare! Emerging from the darkened climb into the sunlit garden, Kuonji Temple and its 5 storey Pagoda was a sight to behold. The Temple complex also includes a school and a university and was abuzz with young monks in flowing robes, silently swishing by us on their to class or prayer. Behind closed doors, came the constant chant of monks in prayer and the whole visit felt very uplifting to know that somewhere in the world people were chanting for peace and enlightenment.

Leaving Kuonji with plenty of spiritual food for thought our minds turned to nourishment of another kind... approaching lunch time, our bus driver herded us onto the bus and drove us to the Yuba no Sato (Yuba village) restaurant. A vegetarian’s delight, our lunch of 6 different “yuba” dishes and their sauces was a happy surprise. “Yuba”, a product of soya beans is definitely one of those occasions when the Japanese name far outweighs the bland English translation which is “Tofu skin”. After our relaxing lunch we once again boarded our bus bound for Lake Shiberiko, a caldera lake high in the mountains.

Our “resident poet” Mr Inoue gently reminded us that we should be composing Haiku and our next stop must have been the inspiration for many of the poems that were to come. The bus climbed the narrow mountain pass at a snail’s pace and reached the sparkling Lake Shibireko surrounded by a mixed forest of Ginko, Maple, Cherry, Cedar and Pine trees all competing for the prize of best colour award. These colours were reflected in the tiny (1.2 km) pristine caldera lake. We took a walk and many photos and drew on the lake’s peaceful scenery for inspiration.

Back on the bus and trying to fend off the desire for a little nap, we listened as Inoue sensei began to read some of the amazing amount of Haiku he had already collected. People had found inspiration in the most unusual of places, had seen things others had not even noticed and these were all reflected in these seasonal short poems. Inoue sensei had an astounding array of encouraging comments for each one and everyone felt included. The friendly atmosphere on the bus was such that it nurtured peoples' efforts. The gentleness and enthusiasm of the students' poems belied their image of tough rugby players. We remembered once again that the day was not only about tourism but also an appreciation of the way other tour members viewed the world and expressed it. All the places we visited, the food we ate, the colours we saw, the chats we had had were mentioned. One woman even wrote about the colourful and elegant English poet Ms Naomi whose friendliness had encouraged students to chat in English.

The miles flew by listening to the seasonal rhymes telling of autumn colours and we were soon back in Kofu as the sun was about to set. People stayed chatting in the university courtyard long after the bus had left. It had been a splendid day and we all felt grateful for what a Temple, a lake, 2 poets, nice people and Yuba had given to our senses.

To top off the day as we drove through the university gates a bright yellow, full moon was rising.

Orla Rylands Morita
(YPU)



四尾連湖訪問

マジカルミステリー俳句ツアーに出発！（抄訳）

天気にも恵まれた秋の文学散歩。学生、俳句愛好家、教員らがともに県立大学を出発した。好天に恵まれたとは言え11月、すっかり冬支度のメンバーの中でひときわ目を引いたのが明るい色の半そでのワンピースにサンダル姿の英国詩人カトリーナ・ネイオウミさんだった。実際にはこの格好がふさわしくなるような温かな一日となった。

30人のメンバーに加えて可愛らしい小さなお子さん1名がバスで向かったのは身延山久遠寺方面であった。お茶菓子をいただきながら楽しくバスの旅をした。

ただし、この文学散歩は吟行である。俳人の井上康明氏から各自に細長い紙が配られ、途中で俳句をしたためるのである。身延山までは90分、互いに自己紹介をしながら移動した。道はゆったりとした富士川に沿って、参加者は紅葉の美しい山腹を眺めていった。身延の道は狭く、ドライバーの手腕が発揮された。見晴らしの良い場所におりると、下のほうに参道があり、小さな木造の店が軒を並べる様子が見えた。

紅葉真っ盛りの時期であったものの境内は訪問客も少なく落ち着いた雰囲気だった。白装束の信徒さんが「南無妙法蓮華経」と念仏を唱えて日本三大門のひとつである門を通過して久遠寺の階段を登って行った。我々もそのあとについて287段の階段を本堂まで上がった。階段を登れば涅槃に到達すると言われるが、みな登り切ったことでただ満足していた。両側に樹々が繁る薄暗い階段から日の当たる境内に出た瞬間、久遠寺と五重塔が目飛び込んだ。身延山には学校と大学があり、たくさん若い僧が静かに舞うようにして通り過ぎていく。閉ざされた扉の先に祈る僧たちの姿が見え、この世界に平和と啓蒙のため念仏を唱える人がいることに気持ちが高揚した。

久遠寺では靈的な糧をたくさんいただき、その後お昼に訪ねた「ゆばの里」では6種の湯葉料理をごちそうになった。湯葉は英語で説明すると「豆腐の皮」になってしまい、すっかり風情が失われてしまうが、大豆で作るごちそうである。昼食後は高い山の中にあるカルデラ湖の四尾連湖に向かった。

地元の俳人井上康明氏から投句の呼びかけがあり、四尾連湖では多くの俳句が作られることになった。バスは細い道をゆっくりと登り、四尾連湖に達した。小さな湖の周囲では銀杏、カエデ、桜、杉や松などが美しさを競い、水面に姿を映し出していた。散策をし、写真を撮りながら、俳句を書く準備をした。

帰りのバスの中では井上先生の俳句朗読・解説に耳を傾けた。驚くほどたくさん作品がすでに投句されていた。珍しい場所について書いたもの、他の人が気づきもしないようなことを書いたものなどがあった。井上先生は一つ一つの俳句に丁寧なコメントをし、各自の作品を讃えた。

学生たちの俳句は、普段見せているラグビー選手のようなごつい印象とは異なり、やさしく熱いものがあった。この日はただの観光の日ではなく、互いがどのように世界を感じて、表現するかということを知る機会となった。訪れたあらゆる場所、口にしたもの、目に入った色彩、交わした言葉、それらが俳句に詠まれていた。カトリーナ・ネイオウミさんのことを書いた作品もあった。

秋色の俳句を聴いている間にバスは甲府に戻った。日暮れ近くであったが、バスを降りた後も大学構内でしばらくおしゃべりが続いた。お寺、湖、詩人、同行した方々、湯葉…、私たちの五感に響く一日となったことに感謝している。

大学の門を車で出ると、明るい黄色の満月が出ていた。

オーラ・ライランズ
(研究協力者・山梨県立大学)

A Memoir of Yamanashi

In October and November 2017, I spent six weeks writing in Japan. The trip was sponsored by the Arts Council England. And for three of those weeks, I was hosted by the Yamanashi Prefectural University (YPU) in Kofu. I'm extremely grateful to all the staff and students of YPU for making my trip such an enjoyable one, but particular thanks are due to YPU's English Literature lecturer, Michiyo Takano, without whom my trip to Japan might never have happened.

My contact with Prof Michiyo Takano came about via a mutual friend, the poet Maura Dooley of Goldsmiths College, in London, where I'd studied for a PhD in creative writing. I'd always wanted to visit Japan but spoke no Japanese (I speak a few words now) and had no contacts in Japan (I would now count several people as friends, not only contacts, in Japan). Maura suggested I contact Michiyo. And Michiyo and the YPU agreed to host me, organising many aspects of my trip and translating and interpreting for me.

I spent the first part of my trip walking in Bashō's footsteps. For 10 days, I walked and travelled from Tokyo to Nikko, Matsushima, Hiraizu, Mount Haguro-san and Kanazawa, visiting many places that Bashō had visited and written about. I wrote a lot and the walking tour was also an excellent introduction to some aspects of Japanese culture. I wrote a (not very serious) blog about the walking tour <http://www.katrinanaomi.co.uk/basho-bassey-blog-japan/>

I then visited the poet collective JUNPA in Kyoto. I read with JUNPA poets, wrote with them and interviewed them about various aspects of poetry in Japan. I then travelled to Kofu to begin my stay in Yamanashi.

I was met and briefed by Michiyo and taken for a delicious meal at a local vegan restaurant, Fluunt. I became a regular visitor to Fluunt during my time in Kofu. I lived for three weeks in a hotel in the centre of the small city of Kofu. The hotel, the Danrokan was a good place to write, with delicious breakfasts and was very friendly. It was also an easy and enjoyable walk to YPU. On my first visit to YPU, I was escorted by Tomomi and Ryota, who were both very friendly and spoke

extremely good English, putting me to shame with my few words of Japanese.

During my stay in Kofu, I ran two workshops: one on performance/speaking in public for Michiyo's students and a wider workshop on writing free verse poetry, which attracted students from YPU as well as poets from the Yamanashi region. Both workshops were held in English, with Michiyo and other staff interpreting where necessary, although I was amazed at how well YPU students and Yamanashi poets could write in English and communicate on complex issues.

I spoke with many Yamanashi poets, finding much common ground in terms of how poetry is seen in Japan and the UK. I always enjoyed these interactions. During my visit to Kofu, I also interviewed the North American poet Jane Joritz-Nakagawa who has lived in Japan for many years and I travelled to Tokyo to meet and interview the poet Hiromi Itō. Again, this was a wonderful experience. I also met a traditional storyteller, Mrs. Hirose visiting her at her home with Michiyo and her husband Hiroshi, where we had fascinating conversations, with Michiyo interpreting, over tea and cake against a backdrop of mountains and a rushing stream, where I'm told you can find kingfishers.

I also attended a workshop by the haiku poet Yasuaki Inoue at YPU, which was useful and enjoyable. I was surprised by how quickly Japanese poets seem to write haiku – far quicker, I'd suggest, than British poets. We seem to spend a lot more time looking out of the window – but then I was sat facing a window, through which I could see Mount Fuji, shrouded in cloud, then shyly revealing itself, so I had a very good excuse. At Inoue's workshop, I learnt a lot and I wrote a lot.

I also went on a literary bus tour, organised by Michiyo and YPU, of beauty spots around Yamanashi. We visited temples, mountains and lakes with Michiyo and other YPU staff and students, and poets from Inoue's 'Cuckoo' group. This was a great opportunity to meet many other people interested in poetry and also to see some wonderful scenery, and, of course, to write. I spent time working with Michiyo's students on translations. I was honoured and surprised to walk into the YPU classroom to find that all the students

had well-thumbed copies of my latest collection, *The Way the Crocodile Taught Me* (Seren, 2016). Again, I really enjoyed talking with these young students on issues around translation and poetry, and answering their questions around specific issues on my poetry, particularly on ideas or language that proved difficult to translate. They also had some interesting queries: was the crocodile in the title poem real? Did I really bite my attacker's arm? And what, exactly, is a brillo pad? I also gave a reading from *The Way the Crocodile Taught Me* to these students at YPU.

I made time to translate haiku by Inoue and Iida Dakotsu into English. Michiyo provided me with very useful literal translations and I then worked to ensure that the English versions made a strong impact via their imagery as well as fitting the 5-7-5 syllabics for haiku. I thoroughly enjoyed working on these translations.

Michiyo set up an interview for me with the Yamanashi newspaper Sannichi. The resulting interview appeared in the newspaper and online during my stay in Kofu.

The visit culminated in a big reading on 12 November at the Fuji Kinenkan with koto playing by Dr. Tamaki Ando, a reading by the traditional storyteller, Mrs. Hirose, and me reading poems from *The Way the Crocodile Taught Me*, which were also relayed on a large screen and then read by YPU students in Japanese. I felt incredibly proud to have my poetry translated and performed in this way. I also read my English translations of Dakotsu and Inoue's poetry, as well as Michiyo's English versions of Yamanashi folk tales. This was an incredibly experience. The reading was extremely well attended, with people of all ages, from children to people in their 80s.

As well as learning a lot about poetry, and writing a good deal, my stay at Kofu was a very sociable one. I played table tennis once or twice a week, and with a friend I met there, also went walking and for a picnic at the beautiful Shosenkyo Gorge. She also took me to a local miso factory (I love miso) and various cafes. I also became a regular at the small vegan café Fluunt, which Michiyo first took me to in the centre of Kofu, and became friends with the owners. I visited art galleries and temples, and met Michiyo and her colleagues regularly to socialise in restaurants. I was very

glad of this interaction, so that I didn't become lonely and also so that I could understand more about Japanese society, food and culture. I also enjoyed trips to some of Kofu's pubs and bars, including a tiny jazz bar where the owner played the piano for us and one of the women in the bar sang.

I received many lovely gifts from my hosts in Kofu. Thank you, your kindness really has been a highlight of my trip.

I also wrote a blog about some of the experiences I had in Kofu and Kyoto
<http://www.katrina-naomi.co.uk/kernow-kofu-via-kyoto-katrininas-poetry-blog/>

After leaving Kofu, I took a few days' holiday in Matsumoto, enjoying the castle and Yayoi Kusama's art. It was then time for the long flight back to London and the long journey home to Cornwall.

Since my return home, I've been commissioned to write articles, for *The Poetry Review* and for *Modern Poetry in Translation* based on my trip to Japan. I'll also be running several Japanese poetry workshops for the Poetry School in London and at the Leach Pottery in St Ives near my home. The Leach Pottery is probably the most famous pottery in the UK. It was founded in the 1920s by the British potter Bernard Leach and the Japanese potter Shōji Hamada. I'm now poet-in-residence at the Leach Pottery, learning to throw pots in Hamada's style and carrying on reading and researching about Japanese pottery. I'm also continuing to read many anthologies of Japanese poetry.

And what about the poetry I wrote during my trip to Japan? Two poems are shortly being published by *The Kyoto Journal*, others are before several magazine editors and I hope to publish the poems as a whole at some point in the future, either as a collection or a pamphlet.

I'm incredibly grateful to Michiyo and to YPU. My visit has been life-changing. I'd love to return. I'm already missing Japan, its people, its poetry and nattō.

Katrina Naomi
Penzance, 18 February 2018

山梨を訪れて

2017年10月から11月の6週間、イギリスのアーツカウンシルの助成金を受け、私は日本で執筆活動を行った。6週間の滞在期間のうち3週間は甲府市の山梨県立大学でお世話になった。私の旅をあれほど楽しくしいものにしてくれた県立大学の教職員、学生の皆様には感謝の気持ちでいっぱいである。とりわけ、英文学を専門分野とする高野美千代先生には深く感謝している。彼女のおかげでこの旅が実現することになったのだから。

高野先生と私が知り合うことになったのは、共通の友人であるロンドン大学ゴールドスミスカレッジの教員で詩人のモーラ・ドゥーリ先生を介してであった。ゴールドスミスは私がクリエイティブライティングで博士課程を修了した大学である。

私はずっと日本を訪れたいと思っていたが、言葉も全く話せず（今はわずかな単語なら話せるのだが）知り合いもいなかった（今では知り合いというより友人と呼べる人が複数いる）モーラ先生が高野先生にコンタクトを取るよう勧めてくれて、県立大学での受け入れがかない、私の旅の様々な面で計画立案をしてくれ、翻訳や通訳も行ってくれた。

旅の初めに、私は松尾芭蕉の足跡をたどるウォーキングツアーに参加した。10日間で東京から日光、松島、平泉、羽黒山、金沢を旅し、歩いた。芭蕉が訪れ、作品に描いた多くの場所を訪ねて回った。私自身大いに執筆したし、そのウォーキングツアーは日本の文化の一面を知る素晴らしい機会となった。旅の様子はブログにも書いている。<http://www.katrinanaomi.co.uk/basho-bassey-blog-japan/>

それから私は京都の詩人集団 JUNPA を訪問した。JUNPA のメンバーと一緒に詩を読み、詩を書き、日本の詩の様々な面について彼らにインタビューをした。その後、山梨での滞在を始めるために甲府に移動した。

甲府では高野先生に会って説明を受け、地元のヴィーガンレストラン「フルウント」でおいしい食事をいただいた。甲府にいる間、私は頻繁にフルウントにお邪魔することになる。私はこの小さな町の中心部にあるホテル談露館に3週間滞在した。談露館は執筆にもってこいの場所で、朝食はおいしく、雰囲気は大変親しみやすい。県立大学にも徒歩で行くのちょうどよい距離である。初めて大学を訪れる際には、学生の徳永朋美さんと高橋涼太さんがホテルまで迎えに来てくれ大学に案内してくれた。ふたりとも非常に親切で英語が堪能である。ほとんど日本語を知らない自分が恥ずかしくなった。

甲府ではワークショップを2度行った。一度は高野先生の学生を対象にした読み聞かせ法を扱うもの、別のワークショップはより大きな規模でフリーヴァース（自由詩）を扱うものであった。後者には県立大の学生のみならず、山梨県内の詩愛好家が参加してくれた。2度とも必要に応じて日本語の通訳をしてもらったが、学生さんも一般の方たちも見事に英語で詩を書き、複雑な問題を扱いそれを伝えることができ、非常に驚いた。

山梨県内の詩人たちと話す機会もあり、日本と英国で詩がどのような存在であるのかということに関し、共通する点を見出すことができた。こういったやり取りは常に興味深いものであった。甲府にいる間、北米出身の詩人中川ジェーン氏にインタビューした。彼女は長く日本に住んでいる。また、東京で詩人の伊藤比呂美氏に会うこともでき、素晴らしい経験ができた。さらには山梨県で昔語りをしている廣瀬かほる氏をご自宅を訪ねた。通訳をしてもらいながら素晴らしい会話を楽しみ、山の連なりとカワセミのいる急流を背景にお茶と和菓子をいただいた。

山梨県立大学では俳人の井上康明氏による模擬句会に参加した。有用で楽しい経験であった。日本の詩人たちがあまりに素早く作品を書くのには驚かされた。イギリス詩人と比べたらはるかに速いと言えよう。私たちのほうが長時間窓の外を眺めているようだ…とは言え、私が座った席からは雲に隠れ少しずつ姿を現す富士山を目にすることができた。つまり都合のよい言い訳が見つかったのである。井上氏の句会では多くを学ぶことができ、作品も書くことができた。

高野先生らが企画した文学散歩バスツアーにも参加し、山梨の美しい場所を訪れた。県立大学の皆様や井上先生の俳句結社「郭公」の皆様と一緒に、お寺、山、湖をめぐった。この日は、詩の愛好家と出会うことができ、素晴らしい景色を楽しみ、作品の執筆もできた大変恵まれた機会であった。

高野先生の学生たちとは私自身の詩の日本語訳の勉強会を行った。県立大学の教室に入ったとたん、学生全員が私の最新の詩集 *The Way the Crocodile Taught Me* (Seren, 2016) を手にしていて、しかも、詩集はしっかり読み込んである様子であるのを見たそのときは嬉しさと驚きがあふれた。若い学生さんたちと翻訳と詩に関して話すこと、また、私の作品についての個別の質問に答えるのは大変楽しかった。とくに翻訳が困難である考えや言語についてのやりとりが意義深かった。中にはこのような質問があった。「タイトルにも出てくるクロコダイルは本物なのか?」「襲われたと

き実際に相手にかみついたのか？」「ブリロパッドって具体的に何？」等々。それから、私は学生さんたちの前で、詩集 *The Way the Crocodile Taught Me* から作品をいくつか朗読した。

また、私は井上先生と飯田蛇笏の俳句の英訳を試みた。高野先生が原作に忠実な英訳を作ってくれたので、それを基にした。五七五の音節のパターンを守りつつ、イメージが強く伝わるように英語訳を整えるよう努めた。大変楽しく翻訳作業に臨むことができた。

高野先生が山梨日日新聞社のインタビューをセッティングしてくれ、その記事が新聞とオンライン版に掲載された。

旅の締めくくりは11月12日の大規模なポエトリリーディングイベントであった。会場は甲府市藤村記念館で、安藤珠希氏による箏曲の演奏と、廣瀬氏の朗読、私の詩の朗読があった。スクリーンに作品が映し出され、県立大学の学生による作品の日本語訳も披露された。このように自分の作品が翻訳され発表されることに私は無上の喜びをおぼえた。私は飯田蛇笏と井上先生の俳句、そして山梨のむかしばなしの英語訳を朗読した。このことはかけがえのない経験となった。このイベントには大変多くの観客が見え、子どもからお年寄りまで幅広い年齢層の方が楽しんでくださった。

詩について多くを学び、多くを執筆したのと同じく、甲府では社交的な時間を過ごした。週に一度あるいは二度卓球をしたのだが、そこで出会った友人と一緒に昇仙峡にピクニックに出かけた。地元の味噌工場やカフェにも連れて行ってもらった。市内中心部のヴィーガンレストランのフルウントは、高野先生に最初に連れて行ってもらって以来行きつけの店になり、オーナーとも親しくなった。美術館や寺院などを訪れたり、定期的に高野先生たちとレストランで食事を共にした。こういった交流は大変有難いもので、ひとりで寂しい思いをすることもなかったし、日本の社会、食べ物、文化をよく理解する助けにもなった。甲府のパブやバーも訪ねてみたが、とある小さなジャズバーではオーナーがピアノを弾き、それに合わせて女性が歌ってくれた。

甲府の友人たちからたくさんの素敵なプレゼントをいただいた。ありがとうございます。ご親切にさせていただき、私の旅が本当に忘れられないものとなった。

甲府と京都の経験についてもブログに書いている。
<http://www.katrinanaomi.co.uk/kernow-kofu-via-kyoto-katrinaspoeetry-blog/>

甲府を出たあと、長野県松本市で二、三日を過ごして松本城を訪ね、草間彌生のアートに触れた。そしてまもなくロンドンに戻る長距離フライト、コーンウォールの我が家への長旅の 때가やって来た。

家に帰ってから、『ポエトリー・レビュー』誌と『モダンポエトリーイントランスレーション』誌からの依頼で日本への旅に関する記事を書くことになった。

その他、ロンドンのポエトリースクールと、我が家に近いセント・アイヴズのリーチポタリーで、日本の詩のワークショップを行うことになった。リーチポタリーはおそらく英国で最も有名な窯元であり、1920年代に英国人陶芸家のバーナード・リーチと日本人陶芸家の濱田庄司によって創設されたものである。私は現在リーチポタリーにポエットインレジデンスとして滞在している。濱田式にろくろを回してつぼを作ったり、読書を進めたり、日本の陶器のことを調査したりしている。また、日本の詩集を今も読み続けている。

日本の旅で書いた詩はどうだったのかと言うと…。2編は間もなく京都ジャーナルから出版されることになっている。他の作品も雑誌編集者の手元にある。すべて近いうちに詩集か冊子に収めて発表したいと希望している。

私は高野先生と山梨県立大学に心から感謝している。この旅は、私の人生を変えるような経験であった。日本のこと、日本の人たち、日本の詩、そして納豆がとても恋しい。

ペンザンスにて
カトリーナ・ネイオウミ
2018年2月18日



カトリーナ・ネイオウミ氏が司会を務めた
11月4日の英詩ワークショップでの
参加者によるオリジナル英詩の発表風景

音楽と朗読による総合芸術イベント Reading Tales and Poems の報告

2017年11月12日甲府市藤村記念館にて、山梨県立大学国際政策学部高野美千代ゼミは、音楽と朗読による総合芸術イベント「Reading Tales and Poems」を開催した。この催しは現代英国詩人のKatrina Naomi氏とゼミの学生たちによる詩の朗読、そして生田流箏曲演奏家である安藤珠希氏による琴の演奏が織りなす日英2か国語の国際文芸交流を目的としている。

イベント当日に向けて、研究室の学生たちはNaomi氏の詩集である*The Way the Crocodile Taught Me*をゼミの時間に読み、いくつかの詩を各自で和訳し、それを発表し合った。詩ということもあってか、使われている語彙は普段馴染みがないようなものが目につき、また普通の英文とは異なり文法という規則がない詩が多く、皆解釈に苦戦していた様子だった。私自身も学生の一人として彼女の詩を読みこんだ。詩を読んで、Naomi氏の幼少期など人生の一部分が何となく目に見えて想像できたときは嬉しさを感じた。また研究室の学生皆がそれぞれ違った捉え方で詩を読んでいることが分かり、改めて詩の解釈は十人十色で個性があって面白いと思った。

和訳した詩の中から、自分が気に入った作品を選び11月12日のイベントでそれを朗読することになった。私は“2 Edinburgh Walk”, “Two Aprons”, “Another Planet”これら3つの詩を選んだ。最初の詩はNaomi氏の幼少期の思い出を詠んだもの、次の詩は祖母との思い出を詠んだもの、そして最後はその祖母との別れの場面を詠んだ作品である。それぞれの作品に趣があり、個人的に気に入った3作品だった。私は3作品の邦題をそれぞれ「エディンバラ通り2番地」、「2つのエプロン」、「もう1つの地球」とした。

イベントの2週間ほど前にNaomi氏が山梨に到着した。時折県立大学に足を運んでくださり、詩の解釈について学生からの質問に答えていただいた。気さくな人柄で、私たち学生は詩に関すること以外にもお互いの出身地や趣味などを教えあったりし、異文化コミュニケーションの楽しさを改めて実感した。

当日は、大学関係者や一般の方まで、沢山の方が見に来てくださった。イベントは3部で構成されており、それぞれの部の冒頭で箏曲演奏家安藤珠希氏による箏の演奏が披露された。

安藤氏の「まりつき」と「かくれんぼ」の演奏で第1部が始まった。第1部は英語冊子*Little Gems of Yamanashi*より、「味噌汁の力」(“The Power of Miso-Soup”)、「善光寺の棟木」(“The Ridgepole of Zenkoji”)、「富士山と八ヶ岳」(“Fujisan and Yatsugatake”)の朗読だった。

*Little Gems of Yamanashi*は、昨年度ゼミで作成した山梨の民話を題材にした英語教材である。英文を朗読してくださったのはNaomi氏、日本語文を朗読してくださったのは富桜会元会長の廣瀬かほる氏だった。廣瀬氏のゆったりとした語り口は、どこか懐かしさを感じさせ、昔話にぴったりだった。

第2部は安藤氏による「衛兵の交代」の演奏で始まった。この曲を作った宮城道雄氏は目が見えなかったが、実際にバッキンガム宮殿を訪れた際に行われていた衛兵の交代の様子を耳で感じこの曲を作ったと言われている。第2部は、*The Way the Crocodile Taught Me*の中から、“The Way the Crocodile Taught Me”, “2 Edinburgh Walk”, “Memory”, “Yellow Dahlias”, “The Woman on the Sideboard”, “Two Aprons”, “Another Planet”の7作品がオリジナルはNaomi氏、和訳はゼミの学生たちによって朗読された。担当した学生はそれぞれ順に渡邊、高橋、徳永、輿水、高橋、徳永、高橋であった。

第3部は安藤氏による「祭りの太鼓」の演奏で始まった。演奏の後、ロンドン大学ゴールドスミスカレッジの学生が作成した詩、詩人のBilly Collins氏の俳句、浮世絵研究家で詩人のRoger Keys氏による“Hokusai says”をNaomi氏が朗読した。そしてそれらの作品を和訳したものをそれぞれ、学生の森、淡路、県立大学の図書館に勤務する山県氏が朗読した。そして次に、山梨県出身の俳人飯田蛇笏氏の俳句を英訳したもの、また同じく山梨の俳人である井上康明氏の俳句を英訳したものをNaomi氏が朗読した。オリジナルの俳句は井上氏によって朗読された。

こうして、音楽と朗読による総合芸術イベント「Reading Tales and Poems」は滞りなく無事終了した。私自身の感想としては担当した3作品を朗読している際、会場の全員が私に注目していることを自覚し、最初の方は緊張を覚えた。しかし段々と、Naomi氏が綴った思いを皆に知ってほしいという思いが溢れてきて、いつの間にか緊張が吹き飛び、朗読を心から楽しんでいる自分がいた。読み終えたとき、Naomi氏の詩を伝えることができて良かったと思った。

今回、山梨県立大学国際政策学部高野美千代ゼミ主催の音楽と朗読による総合芸術イベント

「Reading Tales and Poems」に協力してくださったNaomi氏、安藤氏、廣瀬氏、山県氏、井上氏、またイベントに足を運んでくださった方々には、心から感謝申し上げたい。

高橋 涼太 (学生)

Reading Poems and Tales 朗読作品紹介

カトリーナ・ネイオウミさんの作品

The Woman on the Sideboard

It was you, 40 years back,
an over-the-shoulder glance.
You don't know yourself
or me, anymore

After I helped sort your earrings,
you said how the Lord Mayor
had come to find your butterflies,
match pearls with pearls, enamel with enamel.

I've had to say goodbye to your lamb stews,
Singer sewing machine, photos of Sorrento.
They've all gone into storage;
you keep wrenching the hinge.

You're still my nan,
even if I'm your mayor.

Another Planet

She's leaving this planet,
her roses neglected for spanners, bolts.
I hadn't read the signs, didn't know
she'd been working on that rocket.
And it's complete. I can't think
why I didn't notice this before. I see now
she's packed a small leather case.
So few items. I know very little
about this new earth, if there's a moon,
a sun, lakes, a tide. She's changing
into her silk dress and jacket,
plumping her hair. She doesn't look back,
just shoulders into her coat.
The kitchen door hovers in the artificial breeze.
She's left me everything.

from Katrina Naomi,
The Way the Crocodile Taught Me (Seren, 2016)

サイドボードの写真の女性（ひと）

それは、40年前のあなた。
振り向いて、こっちを見つめる、まなざし。
あなたはもう、自分自身のことも、私のことも、分らない。

私がイヤリングの整理を手伝ったあと、
あなたはこう言った。
「市長さんが来て、ピアスのキャッチを見つけてくれたの。」
「パールとパール、エナメルとエナメルを、
対にしてくれたのよ。」

あなたが作るラムのシチュー、あなたが使ったミシン、
ソレントの旅の写真に、私はお別れをすることになった。
あなたは、すべてをすっきりしまいこんだ。
心の箱の蝶つがいひねって、蓋はあかなくなった。

それでもあなたは私のおばあちゃん。
たとえ私があなたの市長さんだとしても。

もう一つの惑星

彼女はこの星を去ろうとしている。
バラの世話をする代わりに、スパナやボルトを手にしていた。
こんなこと予想できなかった。
あんなロケットを作っていたなんて、知らなかった。
そしてロケットは完成した。
なぜ、もっと前に気が付かなかったのだろう。
彼女は小さいレザーのカバンに荷物を詰めている。
持っていくものは少ない。
その、新しい惑星には、月や、太陽や、池、
あるいは潮の満ち引きがあるのか、私にはわからない。
彼女はシルクのドレスとジャケットに着替え
大きくボリュームを出した髪を整えた。
彼女は後ろを振り返らず、コートに肩を通した。
キッチンのドアが風に吹かれてパタパタと動く。
彼女は私に全てを残して去っていった。



リハーサル風景
於 甲府市藤村記念館

模擬句会と英詩ワークショップ

晴天に恵まれた11月4日、山梨県立大学の富桜祭において、国際交流イベントとして模擬句会と英詩ワークショップが開かれた。午前は模擬句会、午後は英詩ワークショップという構成で開催された。

午前の模擬句会には、日常的に俳句を作っていて、事前に模擬句会の開催を知って参加された方から、当日たまたま富桜祭に遊びに来て、俳句は詳しくないけれど覗いてみたという方までおられ、幅広い層の方々が参加する句会となった。また、イギリスからいらした詩人カトリナ・ネイオウミさんにも参加していただいた。俳人の井上康明先生をお招きし、俳句の作り方や句会の方法を説明していただきながら句会が進められた。まず、各自2~3句を作り、短冊状の投句用紙に自分の考えた俳句を記入する。投句用紙は回収され、よくまぜ合わせた後、ランダムに参加者に配りなおされる。配られた投句用紙に書かれた俳句を、清記用紙に記入していく。清記用紙に記入することで、筆跡から作者が分からなくなる。そして清記用紙に書かれた全員の俳句の中から気に入った俳句を選んでいく。参加された方の俳句を拝読すると、紅葉の美しさ、秋の静けさ、秋空の爽やかな情景などが頭に浮かび、どの作品も素晴らしいものばかりだった。



その日は学園祭ということもあって、学園祭の風景を詠んだ方もいらした。私は模擬句会の前日に、同国際交流イベントの一環として開催された山梨文学散歩ツアーに参加し、身延山久遠寺や四尾連湖などを訪れていた。そのツアーも好天に恵まれた穏やかな一日だったため、私は身延山久遠寺から見た美しい山々の風景を俳句にすることができた。終始和やかな雰囲気の中、句会が進められたおかげで、楽しく参加することができた。



午後の英詩ワークショップは、詩人カトリナ・ネイオウミさんを講師に迎え、ネイオウミさんから英詩を紹介していただき、自分でも英詩を作ってみようというものだった。参加者は男女も年齢層も様々な方々がいらした。まずネイオウミさんからアメリカとニュージーランド出身の詩人が書いた作品をそれぞれ一作品ずつ紹介していただき、その英詩についての解説をしていただいた。参加者がそれらの英詩を声に出して読んだあと、その作品を参考にしながら各自英詩を作った。私は最初戸惑ったが、日常生活のひとこまを切り取った英詩を作ることができた。ネイオウミさんの優しい雰囲気も手伝って、ワークショップも終盤になると、参加されている方々が率先して自分が作った英詩を発表するようになり、またイギリスと日本における、詩の創作活動の違いなどについて、活発な意見が交わされた。

模擬句会と英詩ワークショップに参加したことで、自分にも俳句や英詩が作れるようになったことがとてもうれしかった。これまで自分には出来ないと勝手に決めつけていたように思う。今後は日々の何気ない風景や、思った事を肩ひじ張らずに俳句や英詩にしていきたい。今回このような機会を与えて下さりありがとうございました。

徳永 朋美 (学生)

本プロジェクト関連イベント等の実績

2017年11月3日
文学散歩バスツアー
参加者 31名

11月4日
模擬句会（司会：井上康明氏）
於 山梨県立大学
参加者約 20名

同日午後
英詩ワークショップ（司会：カトリーナ・ネイオウミ氏）
於 山梨県立大学
参加者約 20名

11月12日
総合芸術イベント Reading Tales and Poems
於 甲府市藤村記念館
出演者 12名
参加者 約 50名



カトリーナ・ネイオウミさんによる
ポエトリーリーディング風景



11月12日イベント出演者・運営補助者

本プロジェクトに関連するメディア記事

山梨日日新聞掲載記事（③は電子版に掲載）

- ①2017年10月20日「日英の文芸通じ交流」（11月4日のイベント紹介を含む）
- ②2017年11月9日「自分の気持ちに正直に書く」（詩人カトリーナ・ネイオウミさんを紹介し、あわせて11月12日のイベント内容説明）
- ③2017年11月17日「外国人やまなし暮らし～甲府市滞在カトリーナ・ネイオウミさん～」
- ④2017年11月29日 Reading Tales and Poems イベント内容紹介

むすび

本プロジェクトにおいては予定した通りにすべてのイベントを実施し、順調に成果を上げることができた。「地域文化の発掘と活用、地域文化の創造につながる研究」として展開したプロジェクトであるが、飯田蛇笏・龍太が代表する山梨の俳句文化・文学的遺産を広く内外に知らせる基礎を築くことができた。県立大学ならではの成果という点では、英国の詩人・研究機関との連携を活かして地域文化を国際的な芸術文化交流に昇華させたことである。これによって、地域文化は新たな側面を帯び、より大きなスケールで享受されるようになる。

外部共同研究者の俳人井上康明先生のお力添えで吟行や句会では多くの文芸愛好者に参加してもらえることとなった。英国詩人カトリーナ・ネイオウミさんは、学生や地域の方たちとの文化交流をはじめ、ポエトリーリーディング出演、山梨県ゆかりの俳句の英語訳作成・発表など、様々な形での協力をしてくださった。カトリーナさんは俳人の井上先生と語り合う中で、俳句や山梨の文芸について豊かな知見を得た。甲府滞在中以来、SNS で日本の文芸、山梨の文学について発信している。たとえばカトリーナさんの Twitter のフォロワーは世界中に 5 千人近くいる。また、現在は英国内でワークショップを開いて文芸愛好者に俳句の解説を行う活動もしている。今後も山梨の俳句を海外で紹介して下さるといふ予定で、非常に楽しみである。これをきっかけに、俳句をはじめとする山梨の文芸が海外で知られ、読まれるようになることを願っている。

山梨県立大学・山梨県立女子短期大学同窓会（富桜会）の廣瀬かほるさんに対しては、本プロジェクトに積極的に関与していただいたことについて、心より感謝の意を表したい。総合芸術イベントでは、箏曲の演奏家である安藤珠希先生が、特別な深みのあるポエトリーリーディングの創造に寄与してくださった。山梨県立大学図書館の山形課長の朗読も素晴らしく感動的であった。一連のイベントを数度にわたり取材して、丁寧に記事に書いてくださった山梨日日新聞社の杉原みずきさん、富桜会のウェブサイトでポエトリーリーディングの紹介をしてくださった同窓会の久保さんにも感謝を申し上げたい。休日も含めて実働部隊としてサポートしてくれた県立大学の同僚の先生方、いつもながら有難うございました。県立大学のゼミ学生たちも熱心に文芸作品の解釈・翻訳作業に勤しみ、立派に発表を行ってくれた。

本年度のイベント自体への当日参加者は延べ百数十名ほどではあったが、数年前からつながる取り組みであり、かつ今後も継続される国際文芸交流であるので、実際に関係する人の数は未知数である。文芸交流という、単純に（たとえば金銭や数値で）結果を測れないような活動を通して、国や言語、年齢を超越した相互理解と、地域の芸術文化の発展を促進することが可能となったのである。また、この影響は一時的、短期的なものではなく、長期的につながっていくものと考えている。そのための研究活動費を提供してくれた山梨県立大学に深謝しているし、今後も引き続き支援を願う次第である。

高野 美千代
研究代表者

山梨県立大学 経済学部 経済学系 経済学 2017年度 第1回 学内試験

問題 1 次の文章を読んで、問に答えよ。

— 次の文章を読んで、問に答えよ。 —